

まえがき

増築が完成、また引っ越しも終了し、新しい研究空間ができた。私は22年前に薬理学教授として本学に赴任した時、初代薬理学教授の小山先生が「生体の科学」という医学書院の雑誌に本学薬理学の研究室の紹介をしている文献を熟読した。そこには、学祖吉岡彌生先生ができたばかりの本学の基礎研究室を自慢している、というくだりが出てくる。彌生先生が熱心に顕微鏡をのぞいている写真は有名であるが、医学の進歩に基礎研究を重視なさっていたのであろう。増築が完成した経緯には、本学の岩本絹子理事長が新病院より研究・教育棟の建築を優先して実施して下さったことがある。我々はこのことを忘れてはならない。ここは市中病院ではなく、大学である。医師の働き方改革が施行される一年前から文科省は大学病院の助手がいかに関与しているかという統計を公表している。研究する、しないは本人次第ではあるが、研究できる時間と空間を与えるのは上司の人事マネジメント力や法人の姿勢によると考える。2024年4月からは新しい研究所長のもとで、現在の医療が必要としている困難な問題に対して研究がすすめられることを祈念する。

令和6年3月

学長
丸 義朗

令和3年度に総合研究所と統合医科学研究所が統合され、総合医科学研究所（総研）として始動し、令和4年度は2年目にあたります。総研は共同利用施設（本院および足立医療センター、八千代医療センターに設置）、研究部門、解析サービス部門からなる研究および共同利用機関です。基礎・臨床医学を広く網羅した研究活動を円滑に行なうことができる環境を整備・提供することともに、独自の研究を推進することを目的として設けられています。学内研究者により広く活用され、研究が進められています。令和5年8月には巴研究教育棟の増築部分が竣工して総研の機能は集約されました。本紀要には総研を利用した69の研究成果と総研研究部門の4つ研究成果がまとめられています。総研が全学で活用され、活発に研究が行われていることを示しています。これらの研究をさらに進め、きちんとした論文として発表していただくことを期待いたします。今後も多くの研究者が新たに整備された総研を利用して、本学の研究成果がより充実していくことを願っています。

令和6年3月

研究部門担当事務
肥塚 直美